



館長だより

山形県産業科学館

令和 8 年 3 月 8 日 (日)

発行 館長 加藤 智 一

火と祈りの千年史 — 鬼界アカホヤ噴火から神仏習合へ



昨日、iPS 細胞（人工多能性幹細胞）を発見した、山中伸弥先生とタモリが出演していたNHKの番組を拝聴させていただきました。日本人の独特な宗教観の成り立ちが、私なりに整理できました。ご批判覚悟でご紹介させていただきます。

いまから 7,300 年前、九州南方の海は、突如として赤い光を噴き上げました。鬼界カルデラの大噴火です。後に「鬼界アカホヤ噴火」と呼ばれるその災厄は、縄文の人々にとって想像を絶する出来事でした。空は昼なお暗く、灰は雪のように降り積もり、海は沸き立ち、九州南部の大地は一面の火砕流に覆われました。この災害を直接記録した文献は当然ありません。しかし、火山灰の層は語ります。人々は集落を捨て、海を渡り、山へ逃れ、あるいは新たな土地へ移り住んだことでしょう。彼らの心に刻まれたのは、自然への畏れと、見えざる力への畏敬の念、それが祈りという形となって具体化していきます。縄文の祭祀は、こうした自然観の上に育まれたと想像できます。山は神の宿る場所、火は浄化の力、海は生命の源といった具合に。ですから災害は恐怖であると同時に、神々の意思を示す徴でもあったと思われれます。そして、この「自然と神が地続きである」という感覚は、のちの日本宗教の根底に流れ続けます。

やがて弥生、古墳、飛鳥と時代が移り、しだいに国家は形を整えていきますが、地震や噴火といった自然災害は相変わらず人々を悩ませ続けます。加えて、飢饉や疫病の蔓延など、そのたびに人々は天を仰ぎ、祈りを捧げるしかありませんでした。そして奈良時代。聖武天皇の治世は、まさに災厄の連続でした。天然痘の大流行。飢饉と反乱。そして、三日三晩揺れ続けたと記録される天平地震です。大地は裂け、寺院は倒れ、民は怯え、国は揺らぎました。聖武天皇は深く悩みます。天はなぜこれほどまでに怒りを示すのか。自らの力の限界を悟ったとき、彼の心に浮かんだのは「仏の力」だったのではないのでしょうか。

この当時、仏教はすでに日本に根づきつつありましたが、国家の中心に据えられたわけではありませ

んでした。しかし、聖武天皇は考えます。「仏の慈悲をもって、国を護ることはできないか」と。こうして、国分寺・国分尼寺の建立、大仏造立という壮大な国家事業が始まるのです。大仏は、ただの巨大な像ではありません。それは、災厄に揺れる国をひとつにまとめ、天皇の祈りを形にした象徴だったのです。ですが、ここで重要なのは、日本人が仏教を「外来の宗教」としてではなく、「神々と共にあるもの」として受け入れられたという点です。もともと日本には、山川草木に神が宿るという自然信仰がありました。仏教が入ってきたとき、人々はそれを排除するのではなく、「神も仏も、同じ世界の中で働く存在」として理解したのです。これが、のちに「神仏習合」と呼ばれる思想の萌芽です。

神はこの国の守り手、仏はその上に広がる慈悲の光。神は現世を、仏は来世を護る。あるいは、神は仏の化身である。そんな柔らかな融合が、自然と生まれていったと思われれます。この柔軟さは、縄文以来の自然観に根ざしています。鬼界アカホヤ噴火のような巨大災害を経験した人々は、自然の力を超えた存在を感じずにはいられなかったことでしょう。その感覚は、時代を超えて受け継がれ、聖武天皇の時代に、仏教と神道を結びつける土壌となったのではないのでしょうか。

大仏が完成したことで、国を護る祈りが形になりました。災厄の時代を生き抜いた、人々の願いが結実した瞬間でもあります。こうして、日本の宗教文化は大きく動き出します。神と仏が共に国を護るという思想は、平安、鎌倉、室町へと受け継がれ、やがて神社の境内に寺が建ち、寺の中にも神が祀られるという独特の世界観を生み出しました。その根底には、「自然の力を畏れ、祈りを捧げる」という、縄文以来の精神が脈々と流れているのです。

